

日本ラカン協会第25回ワークショップのご案内

「ポスト68年」の^{コレクティブ}集団——ラカン、ガタリ、ウリと現代

日時：2018年9月22日（土）14：00～17：30

場所：京都大学 人間・環境学研究科棟 3階 333教室

（〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町）

参加費：無料

提題者：武田 宙也 氏（京都大学大学院人間・環境学研究科）、

上尾 真道 会員（京都大学人文科学研究所）

司会： 松本 卓也 理事（京都大学大学院人間・環境学研究科）

ラカンにとっての「ポスト68年」とは一体何だったのだろうか。周知の通り、68年の前年、ラカンは「〈学派〉の精神分析家に関する1967年10月9日の提案」を発表し、学派分析家を生み出すための「パス」と呼ばれる仕組みを考案している。興味深いことに、この提案の際に、彼は精神分析家の集団（グループ）のあり方を、フロイトの「集団心理学と自我の分析」における教会と軍隊をモデルとする集団—それはラカンが批判した、フロイトがつくった国際精神分析協会という集団の姿でもあった—をもちだすことによって考察しようとしている。また、「パス」という装置それ自体も、個人の特異的＝単独的な分析経験の証言がいかに関学全体に伝達されるのかという、個人と集団をめぐる厄介な問題を扱っていると言えるだろう。

このような個人と集団のあいだの問題は、フェリックス・ガタリやジャン・ウリにとっても重要なものであった。特に、昨年翻訳が刊行されたウリの『コレクティブ—サン・タンヌ病院におけるセミナー』は、個人が集団というシステムのなかにもありながらもそれぞれの特異性が保持されるため「ほんのちょっとしたこと」の重要性、という極めて重大な論点を提示している点で貴重である。これらのラカン、ガタリ、ウリの思考の重要性は、過去のものとなったわけではなく、近年の「当事者研究」や「オープンダイアログ」といった集団の存在を前提とする臨床実践への注目を承けて、特にそれらとの差異の比較検討という観点から、むしろその重要性を増してきているように思われる。

そこで本ワークショップでは、初めに司会者である松本がそれらの現代的な臨床の文脈を参照しつつラカン、ガタリ、ウリの議論との類似点と差異を中心に文脈付けを行い、『コレクティブ』の訳者でもある上尾氏、武田氏にそれぞれ創造性とセクシュアリティをめぐる観点から提題いただき、「ポスト68年」の集団、ひいては現代における集団の問題についての議論を深めたい。

「ジャン・ウリの創造論をめぐる」 (仮)

武田宙也

ジャン・ウリは、『コレクティブ』にまとめられたサン・タンヌ病院でのセミナーの翌年にあたる1986年11月から1988年5月にかけて、パリ第7大学で精神病と美的創造の関係をめぐる講義を行った(本講義録は、1989年に『創造とスキゾフレニー』のタイトルで出版されている)。本発表は、この2年度をついやした講義から出発して、フェリックス・ガタリの「美学」やアンリ・マルティネのリズム論なども参照しつつウリの創造論を浮き彫りにするとともに、それが彼の「コレクティブ」をめぐる思考ととり結ぶ関係についても明らかにしたい。

「ラカン・マルクス・セクシャルレボリューション」

上尾真道

フランス68年5月の多様な側面のひとつとして、それが親密性をめぐる変化の希求であり、またその実現の兆しであった、ということが挙げられるだろう。つまりは(複数の仕方での)性の解放である。その限りで、当時から学生たちの反乱は、本人たちの同意のあるなしにかかわらず、しばしばW.ライヒやH.マルクーゼの名に結び付けられた。フロイト-マルクス主義のこの中心問題は、では、ラカンにおいて、どのように受け止められたのか。そこで、本発表では、性という論点を軸に、68年以降のラカン理論を、特にラカンによるマルクス読解の再検討を通じて再検討する。また彼の読み筋が、同時代の構造主義的マルクス主義(アルチュセール)、あるいはポスト構造主義的フロイト-マルクス主義(ドゥルーズ=ガタリ)とどのような関係にあるか、考察を試みたい。

日本ラカン協会事務局

連絡先：〒 150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院大学 総合文化政策学部 3号館 3204 福田大輔研究室

E-mail : sljsecretariat@netscape.net